

ろくべん館だより Vol.44

『漆畑再訪』

『南木曾の木地屋の物語—ろくろとイタドリ』（松本直子著）という本の中で、著者は南木曾・漆畑にある工房やまとの小椋榮一さんの話を書き留めている。榮一さんは「木を伐る」とか「木を倒す」という言葉は使わないでくれと言ったという。では、何というのか？木は『寝かす』というのだと言ったそうだ。

小学生の頃から父親と一緒に山に入り、榮一さんは先祖代々の木地屋の仕事を手伝いながら育った。学校から帰ると、今日はどこそこの山にいるからという父のいいつけ通り、ひとり山に入って行く。木の生い茂る薄暗い森を歩くと、藪がガサゴソと鳴り、頭上では鳥がバサバサと羽ばたいた。心細い思いで父の仕事する山にたどり着くと、帰りは背負えるように切った木をショイタにくくって、父と一緒に下りてくる。そうやって自分の脚で山を熟知し、どこの山にどんな木が立っているかを知り、自分の手で木を伐り、背中で山から木を運び出した時代を知る、榮一さんは最後の世代だった。「木を伐る、倒す」という言い方を酷いと感じ、「寝かす」という言葉に木に対する思いを込める。それは、木の命の大切さを体の芯から学んだ人の言葉なのだ。

木の命をいただいて物を作ってきた木地屋は、やたらに木を伐ることをしない。木を選ぶときは斧を幹に小さくあてて、まず「木の性^{しょう}」を確かめてから斧を入れる。木を寝かせる際には、枝や葉を敷いて木が傷まないように「寝床」をつくってから倒した。日柄をみて木を伐る日を決めると、その朝は神棚に御神酒を供え手を合わせてから家を出る。長い年月を生きてきた木は、倒れるそのときに「鳴く」という。ものすごい風圧とともにすさまじい地響きを立てて倒れる。それを榮一さんは「木は鳴いて寝る」と表現した。それまで大木が立っていたところに、ぽっかりと青い空が現れる。大木を支えていた木の元に笹を立て、手を合わせて感謝する。そうやっていただいた木の命を粗末にするようなことはできない。「先ず木に申し訳ないようなものを造るな」、それが榮一さんの信条であった。

昭和三十四年の伊勢湾台風は、一夜にして山の木々をなぎ倒していった。以来、南木曾の山に木地屋が入って自分の手で木を伐ることはなくなったという。

六月のある日、大平宿を訪ねたいという遠方からの友と一緒に出かけた。大平宿までの同じ道をそのまま戻る気になれず、また行ってみたいと思っていた漆畑に下る道を進んだ。

久しぶりに訪ねた工房やまとは、六年前に榮一さんが亡くなり、後を継いだ息子の昌幸さんが店を守っていた。昌幸さんの淹れてくれたコーヒーを啜りながら、「後継者は？」と問うと、「ええ、長女が今、私も通った輪島にある学校に行っています」という答えが返ってきた。

もう七、八年も前になるか、漆畑の「ろくろまつり」に行ったことを思い出した。この

日、漆畑の木地屋の人たちは、絵巻物から出てきたような昔ながらの白い装束と烏帽子を身に着け、手回しの轆轤ろくろを引いて器を作るようすを再現する。それを目当てに工房やまを訪ねたのだった。店の前で、やって来る車に駐車場の案内をしている女の子たちがいた。その子たちに、榮一さんがねぎらいの声をかけているのを見かけた。ああ、お孫さんだったのか。そして、轆轤でのデモンストレーションが始まると、さっきの女の子のひとりがおじいちゃんである榮一さんの引く轆轤に付けた木地に、カンナを当ててみるみるうちに皿を削っていった。女の子の意外に確かな手元と、それを見守っていたおじいちゃんの眼差しが思い出された。二人の息はピタリと合っていた。あの時、中学生になったばかりぐらいにみえたあの子だったのか。

コーヒーの椀を置くと、榮一さんの作品が展示されている店の二階に案内してもらった。時を同じくして木曾福島の興禅寺で「小椋榮一展」が開催されていたが、昌幸さんは「一番いいものは店に置いてありますから」と二階の展示室に連れて行ってくれた。長い風雪に耐えた木がもつ杳目が、榮一さんの手によって結晶となって出現したような作品に、鳥肌の立つのを覚える。玉杳、縮み杳、緋杳、虎杳、葡萄杳……。

榮一さんは木に惚れる人だったそうである。良い材に出会うと、それを求めずにいられない。そんなふうを集めた材が、倉庫にはまだたくさん寝かせてあるのだそうだ。榮一さんの作品を丁寧に説明してくれる昌幸さんもまた、厳しい風雪に長年耐えて生き抜いてきたひと癖もふた癖もある暴れる木をなだめながら、削り出し漆を塗りして、作品に命を与えてゆくことだろう。真摯に木と向かい合う血筋は榮一さんから昌幸さんへ、そして孫へと確実に受け継がれていることに胸うたれながら帰途についたのであった。